

第2章 三上前田公民館の調査

調査地 野洲市三上字前田 1162 番地 2、1162 番地 16

調査原因 自治会館の新築

調査期間 平成 26 年 5 月～平成 26 年 6 月

調査概要 平成26年3月から4月に、野洲市三上の前田自治会から、現有の公民館を解体して新しい自治会館に建て替えを行う旨の相談を受けた。前田公民館は、兼ねてから旧篠原村の篠原小学校の校舎の一部を移築した建物であることが知られていた。移築されたのは昭和32年頃であり、全体的にも老朽化が進行しており、このまま建物を維持していくことが困難なため、自治会としては新たな自治会館を建設するに至ったものである。

教育委員会文化財保護課では、建物の解体に伴い、建物の規模・構造についての現地調査、篠原小学校の校舎が当地に移築された経緯などの追跡調査により、記録化を図ることとした。また、公民館内に伝わってきた記録や物品類についても調査を実施した。

建物の実測・記録調査については、文化財保護課の花田勝広・福永清治が担当し、公民館伝来の記録・物品類の調査については歴史民俗博物館の行俊勉が担当した。

篠原小学校の沿革 明治時代の前半期、近代の学校教育制度が各地域に普及・浸透していく中で、野洲郡篠原村においても小学校が設立されている。当時は篤志家の家屋を転用して校舎としていたらしく、校舎に加えて備品などが寄付された由を記録した文書が残されている。篠原小学校としては明治23年(1890)10月30日に正式に創立されており、篠原村と北里村の両村の組合立による大篠原尋常小学校が、現在の大篠原の街道町集会場の位置に存在していたとされる。この両村組合立の小学校は、明治36年(1903)10月に廃校となり、篠原村立



第1図 調査地位置図

篠原尋常小学校が現在の篠原小学校の地に開設された。その後、翌明治 37 年には校舎 1 棟が増築されて高等科併設となり、校名が篠原高等尋常小学校に改称されている。

大正期に入ると、高等尋常小学校に他の学校施設や訓練所施設などが付設されるに伴い、校舎等の増新築が行われている。昭和 16 年(1941)の戦時下には国民学校令が交付され、篠原高等尋常小学校から篠原国民学校に改称された。そして、戦後の学制改革に伴い、校名は篠原村立篠原小学校となった。

校舎の整備については、明治 36 年に現在地が校地として定められて以来、大正 9 年(1920)から大正 13 年(1924)にかけての時期が建設の画期とされる。前田公民館として移築される以前の校舎建物は正式な建築年月日が伝えられていないが、おそらくこの時期に建設されたものとみられる。大篠原には、小学校の校舎が写された大正前期と戦時中の古写真が伝来しているが、前田公民館の建物と屋根構造が酷似した建物が複数棟存在していたことがうかがえる。

後述するが、昭和 32 年(1957)には篠原小学校の校舎が新築されており、このときの旧校舎の一部が三上前田に移築され、以後公民館として使用されたものである。

建物の概要

解体前の段階における建物の平面は、桁行きが約 10.8 m、梁間が約 12.1 m の規模である。これに、建物の北東辺の外部にトタン張りによって壁と屋根を増築した物置が付属する。桁行きは 5 間分の柱間があり、建物の南東辺におよそ半間分の庇が付属する。梁間については変則的な柱配置であるが、棟を中心として両側 2 間分で合計 4 間の柱間があり、南西辺に半間分の廊下が付属する構造である。建物の北東辺にある柱間 3 間分の「作業場」・「流し」・「板の間」および上述の「トタン葺き物置」については、三上前田に移築されてからの後補である。

屋根の構造は 3 方向の寄棟造りである。建物の北西辺については切妻形状となるが、本来校舎として建物が利用されていた当時は、建物の規模自体が長屋形状であり、全体として四面の寄棟造りであったとみられる。建設の際に公民館として活用する部分（柱間 5 間分）のみが移築されたために、長屋状建物を切断した形状となっている。

建物の外壁は、南東辺については上半分が白壁で下半分が腰板張りとコンクリート調の



戦時下の篠原小学校（『近江 大篠原の歴史』2003 年大篠原郷土史編集委員会から転載）

塗り壁である。玄関側の南西辺は、上半分がコンクリート調の塗り壁で、下半分が細かい砂粒を撒き散らしたようなモルタル吹き付けの外装処理が施される。北西辺については大部分が腰板張りとなる。移築後に増築した北東辺はトタン張りである。総じて移築当時以降に改装された個所が多く、学校当時の部分は存在しないとみられるが、建物の南東辺でみられるように、本来は白壁塗りが施されていたと考えられ、この部分が当時の外観を引き継ぐものと思われる。

建物内部の現状の間取りでは、棟のラインを中央軸として、南西側が大広間と廊下が占め、大広間は畳 20 畳敷の広さである。大広間は、現状としては建物奥にあたる北西側の 8 畳間と中間の 8 畳間、4 畳分の小部屋に分割され、天井側には建具で仕切るための棧が残存するが、床側の棧は撤去されている。廊下部分は床板張りとなる。棟ラインを中央軸とした北東側では、建物奥に 6 畳間があり、手前側は土間となる。大広間に接しては広縁状の板張りの下段が設置されている。先述のとおり、建物北東辺の「板の間」・「流し」・「作業場」の部分は後補である。

なお、三上前田自治会所蔵の記録類に、この公民館を移築した際の青焼き設計図面が保存されていた。第4図にそのトレース図を掲載しているが、現状の間取りと移築当初の間取りにも差異が認められるのがわかる。すなわち、大広間 20 畳分のうち、奥側の 16 畳分については、明確に 8 畳間二部屋分に分割されており、手前側 4 畳分については、コンクリート床の玄関・下段と土間に分割されていたようである。建物南西辺の廊下の奥には、小規模な突出部の「便所」の表記があるが、現状では撤去されていて、痕跡も認められない。棟ライン北東側では、奥の 6 畳間の 1 畳分には押入れが存在するが、現状では存在せずひとつの 6 畳間となる。また、大広間と土間との間の広縁状の上がり口はもともと存在しなかったようである。現状で大広間と奥の 6 畳間は建具による仕切りで相互に行き来が可能であるが、本来は建物の棟ラインには壁による間仕切りが存在したようであり、互いに行き来はできなかったようである。

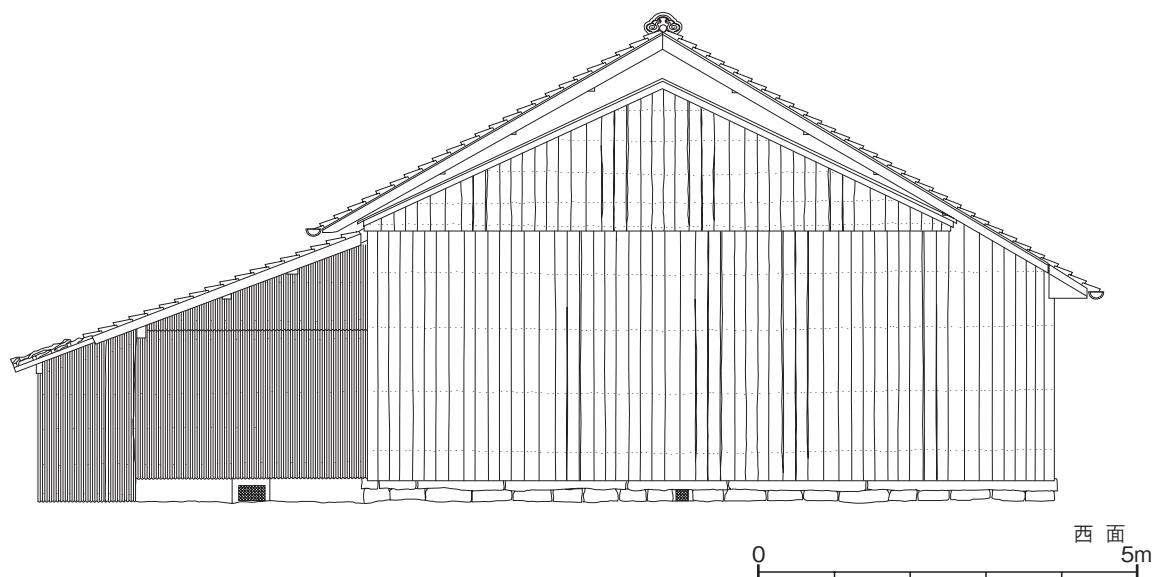
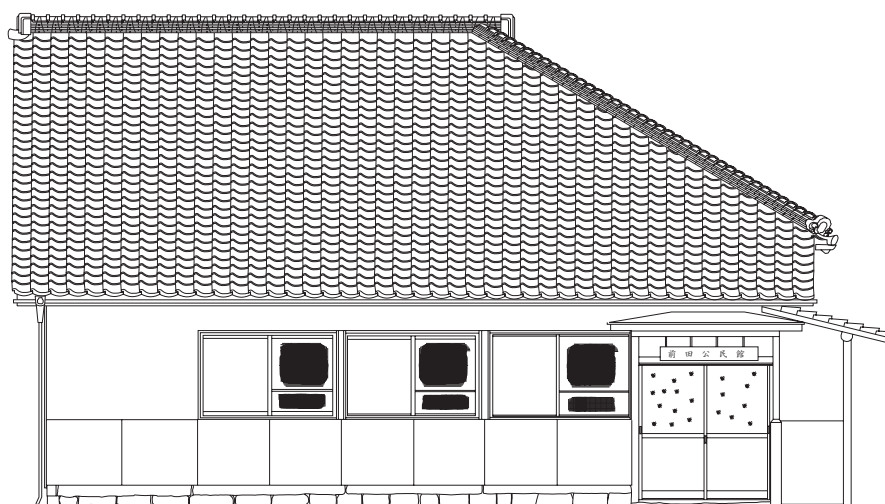
このように、建物の外装や内部の間取りについては、年代を経過するにしたがい、順次改変や後補が行われていったようである。また、移築当初の設計図を見ても、本来の学校校舎の間取りからは大幅な改変が行われたことがうかがえる。結局、小学校当時の間取りを踏襲する部分としては、棟部分に付属する半間分の廊下のみがその名残りをとどめるものと思われる。現状で中央軸の棟ラインで分割されている本体部分は、本来は教室を主な用途とした一体的な大広間として利用されていたのであろう。

篠原小学校からの移築

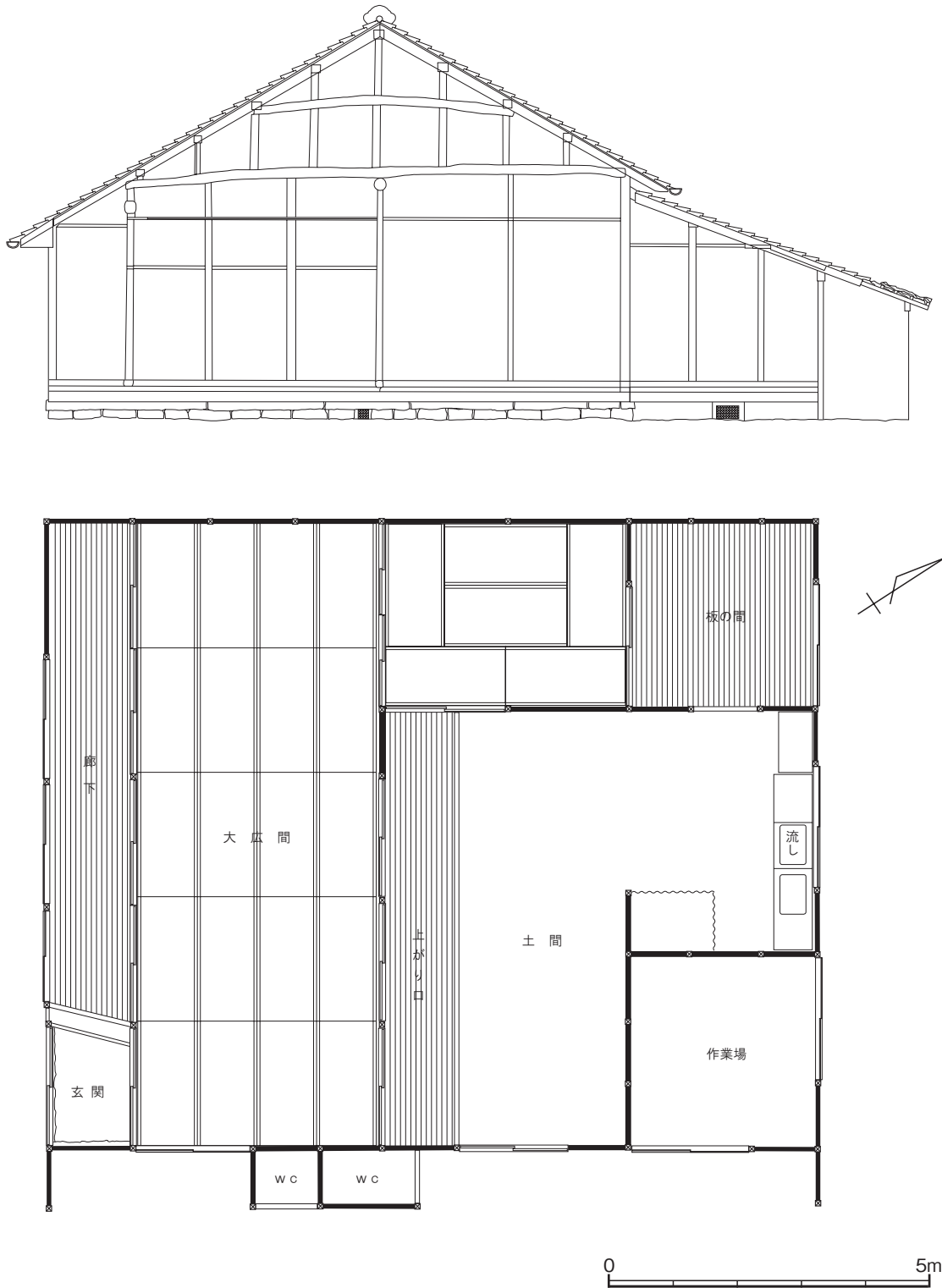
この地に公民館が移築される以前は、代々御上神社の大祝職を務めた三上家の屋敷地が存在していた。屋敷自体は明治の終わりごろには取り壊されており、公民館移築直前は畑地として利用されていたようである。屋敷を取り壊した後の三上家は京都へと移っている。

当時の三上前田は27軒程度の集落であったが、集落共有の施設としては存在せず、字の寄り合いの際は地下惣代の私邸に参集していたという。戦後、町村民が集うための施設である公民館が各地に普及して建設されるにつれて、三上前田においても集落共有の寄り合いの場を求める気運が高まったものであろう。

先に述べたように、戦後の篠原小学校では、昭和 31 年から昭和 32 年にかけて新校舎の新築・移転が行われ、それまでの旧校舎は解体処分された。篠原小学校から三上前田へ校舎が移築された正確な期日は伝えられていないが、昭和 31 年から 32 年にかけてのタイミ



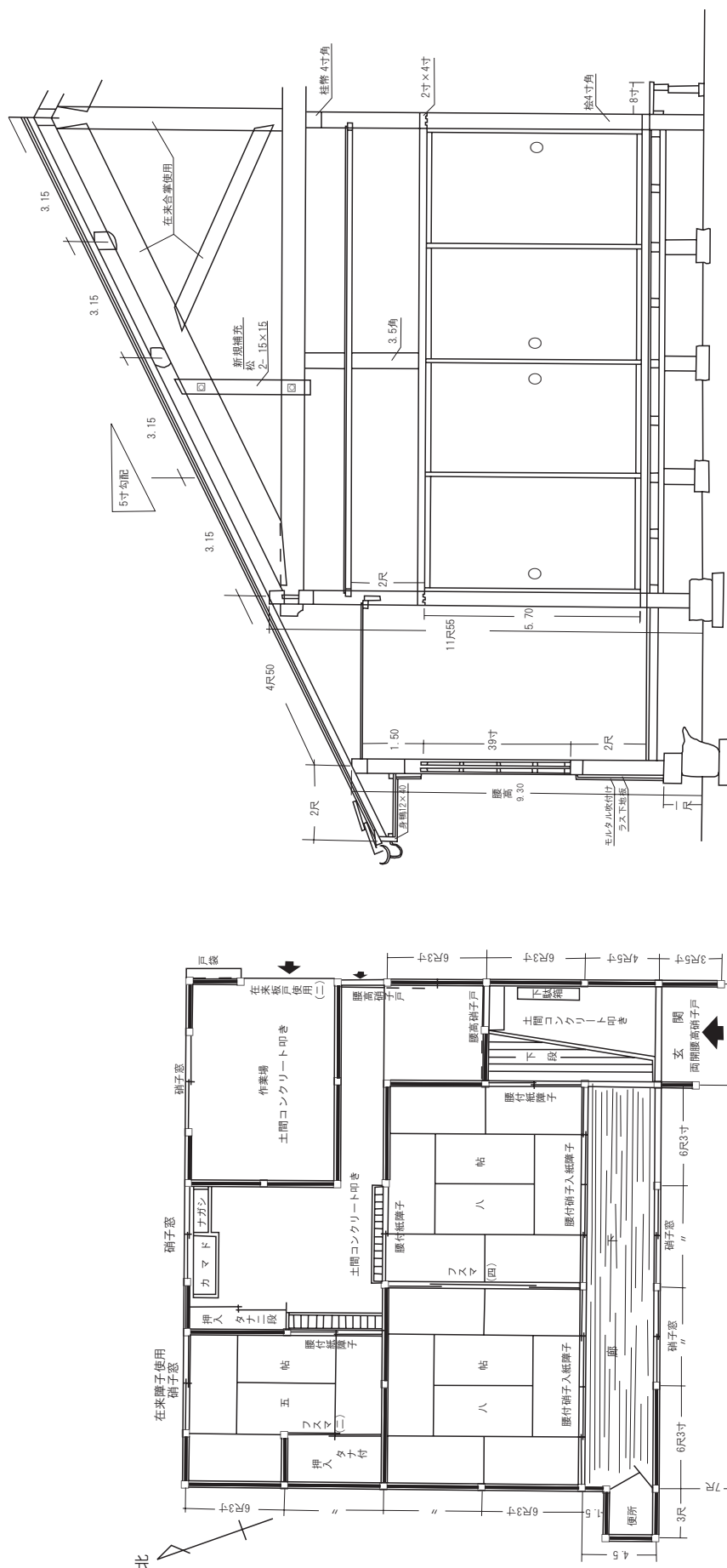
第2図 前田公民館建物外観立面図



第3図 前田公民館建物内部断面図（上）・建物内部間取り図（下）

ングで、地下役員が篠原村や地主である三上家と建物譲渡と土地の所有権移転について協議を行ったことが伝えられている。このため、移築は昭和31年から昭和32年にかけての期間に執り行われたことになる。

移築された部分の建物は、小学校の校舎としては、本来御神影を祀る奉安殿として利用されていた施設を戦後になって教室に転用されていたとされる。先述のように、建物は本来長屋状の形状であったとみられるが、集落の寄合所に必要な範囲のみを部分的に移築し

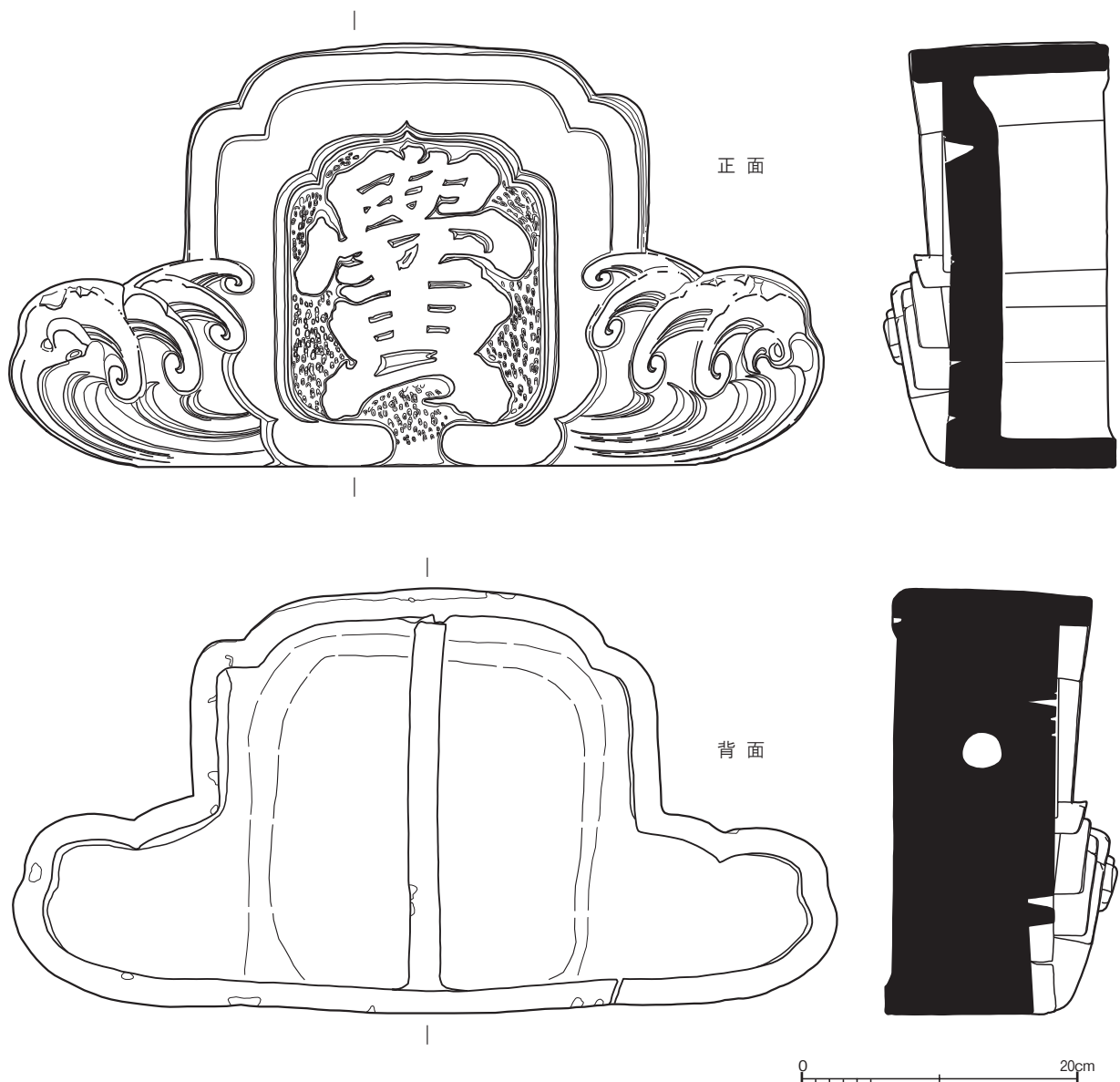


第4図 三上前田自治会所蔵「公民館青焼き図面」トレース図

たものとみられる。移築したのは、骨格になる柱や梁の部分と、礎石・瓦などで、内部の間仕切りの柱や建具などは後補の部材であるとされる。この後補部材は、三上前田の有志による寄付が大部分を占めると伝えられる。また、移築に際しては三上前田の住民が総出で行い、篠原小学校から三上前田まで必要な部材全てを大八車で運搬された。棟上げについても、住民総出の共同作業で行ったと伝えられている。

鬼瓦について 三上前田公民館の棟の端部にあたる「端(はな)」の部分には、篠原小学校においても使用されていた鬼瓦が据えられていた。今回の解体工事に際し、この鬼瓦については廃棄することなく、歴史民俗博物館に寄贈いただいた。

この鬼瓦は高さ 30.7cm、幅 59.2cm、奥行き 16.2cmで、隅角部が丸みを帯びた入り隅状となる方形の箱型を呈し、両側の下部には後述する波の形状があらわれる紋様部位が存在する。棟を跨ぐ内割りや足が存在せず、下端部が平らな形状であり、鬼瓦の形態としては寄棟屋根に使用されるタイプである。実際に屋根に葺かれるときは、熨斗瓦や台状の箱瓦の上の平らな上端面の上に載せられることになる。



第5図 前田公民館鬼瓦実測図

瓦当面の中央部には、「甕（コウ）」の文字が大きくあしらわれる。これは「学び舎」の意味があり、この鬼瓦が小学校校舎用の特注品であり、篠原小学校の校舎に使用されていた部材であることを物語る。そして、両側には波の装飾部が存在するが、波は水を連想させるもので、火除けの意味も込められる。この鬼瓦の上面には「江州八幡本町元 大極上々瓦製造売捌所 福井増太郎」のヘラ描きの銘が認められた。この瓦が八幡瓦の老舗の瓦工として知られる福井家で手がけられた製品であることを示すものである。

ま と め 今回の調査により、前田公民館として利用されていた建物は、明治の終わりごろから戦後の時期にかけての篠原小学校の校舎であり、この校舎の一部が移築されてきた経緯が明らかになった。建物の内部構造はかなり改変されていたが、廊下などの間取りの一部と屋根構造などの外観については、校舎として使用されていた当時の名残りととどめるものであった。移築時や移築後での公民館利用においても、字の住民が主体的に寄り合いの場形成に向けて努力してきた様子を垣間見ることができた。（福永）



前田公民館鬼瓦拓影



前田公民館遠景



前田公民館南東側外観



前田公民館北東側外観



前田公民館屋根の棟端部
鬼瓦



前田公民館 鬼瓦



前田公民館北西側外観



前田公民館南西側外観



前田公民館内部(その1)



前田公民館内部(その2)